



年次晩餐会にて、左より今西会長、徳仁親王、史占春主席

昭和六十三年年度年次晩餐会が
旧ろう三日、会室にほど近いア
ルカディア市ケ谷(私学会館)
で開かれた。
ここ数年、年次通常総会
や、年次晩餐会の場が、このア
ルカディア市ケ谷に固定された
ようだが、会室を訪れる機会の
少ない地方会員にとっては、あり
がたい配慮といえるのではない
だろうか。
会場となる「富士の間」のロ
ビーには、恒例の簡易バー、販
売コーナーが設けられ、旧知
の会員同志が、楽しげな歓談に

ふける光景が随所にみられ、早
くもこの日の大盛會を窺い知る
ことができた。
定刻五分前には浩宮さまも着
席される。浩宮さまには、この
年次晩餐会出席を心待ちされて
いたとも聞く。
十八時、高遠宏理事の司會に
より、式次第が始まった。
冒頭、挨拶に立った今西寿雄
会長は、六十三年度の会の大イ
ベントであったチョモランマ／
サガルマタ三國友好登山、婦人
懇談会のシヴァ峰登山が成功裡
に終ったことは、会員各位の絶

その四氏は、わけても三國友好登山
の推進力となった、中国登山協会の史
占春主席、ネパール登山協会のクマ
ル・カドカ会長、そしてインド登山財
団のH・C・サリナン会長、スイスの
名ガイド、S・ブラヴァントさん。

海外四氏が、名誉会員に――

昭和六十三年年度年次晩餐会



1989年(平成元年)
1月号(No. 523)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

- 昭和 63 年度年次晩餐会……………(1)
- 海外の山……………(2)
- 「1989.1 翔ぶ男」
- 随想……………(3)
- 「三国登山の実り」「通信がとど
えて」
- 自然保護随想……………(7)
- 「イエローストーンの山火事」
- 図書紹介……………(7)
- 「北八ヶ岳の黒い森から」「新・日
本百名山」「大イワナの滝壺」「ひ
とりぼっちの日本百名山」「雲取
山に生きる」
- ウッドシャフト・ピッケル
- 二村のここと(下) 安藤忠夫……………(8)
- 報告……………(10)
- 「シヴァ峰登山およびトレッキ
ング」他
- 追悼・小島隼太郎さんを偲ぶ……………(12)
- 会務報告・ルーム日誌他……………(13)
- 新入会員・住所変更等……………(14)
- 図書受入報告 図書委員会……………(14)
- お知らせ……………(15)
- 婦懇・青懇委、海外委、図書委

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時
日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

推進するなかで、宮崎、京都、北海道
と実施してきた支部大会を、明年度は
山陰支部創立三〇周年記念にあわせ、
この地で開催する旨を報告。さらにま
た、創立一〇〇周年を目指して、未来
に向けての日本山岳会ビジョンづくりに
向けて、貴重な意見をだしていただきたい
と、会員各位の積極的な協力も要請し
た。物故者(別記) 黙とうのあと、新
名誉会員の発表が行なわれる。
特記すべきことは、本会創立をアド
バイスした、故W・ウェストン氏以
来、海外から四氏を名誉会員に迎えた
ことである。

お知らせテロップ電話
234 六六五九

四氏については、大塚博美副会長から、そのプロフィールが紹介される。

当日晩餐会に参席した、史占春中国登山協会主席には、今西会長から名誉会員章と、感謝楯が贈呈された。

これに対して史主席は、浩宮さま、今西会長、会員に敬意を表したあと、

「今回はからずにも名誉会員に推せんされ、この記念すべき年次晩餐会の席上、名誉会員章をいただいたことを心から感謝している。この榮譽は、単に私に与えられたものではなく、中国登山界に与えられたものと思う。先の三國友好登山の成功は、三國友好の勝利であり、中国・日本が培ったこの友好を、今後さらに各方面に推し進めて行きたい。浩宮さまが日本山岳会の会員であられることは、日本山岳会にとって非常にしあわせだと思う。浩宮さまにはぜひ一度、中国にいらしていただきたい。それが実現すれば、中国登山界最高の譽れとなる。他の海外名誉会員に対して、おめでとうと申し上げる」と謝辞を述べた。

国内の newName 名誉会員は、広瀬潔、初見一雄、関根吉郎、辰沼広吉、F・マラーニの四氏(略歴別記)。出席の広瀬、初見、関根の三氏に、今西会長から名誉会員章が贈られた。

代表として挨拶に立った初見一雄名誉会員は、「長話をすると、おな

海外の山

1989・1 翔ぶ男

正月、と言えば風上げである。

しかし、上げるのではなく、人間がその風にしがみついて空を舞う、という発想は一体誰が最初に考えたのか。ともかく現代のヒマラヤやアルプスでは、風など及びもつかない新たな空の散歩道具が果敢に使われ始め、そして、ついには八八四八の頂きから空を飛んだ人間まで現われたのである。

十年前のことになるが、フランスの冒険男がK2南西稜の七六〇〇の地点からハンググライダーで飛んだ、と聞いてびっくりしたのを覚えている。いまでこそハングもパラパントもそう珍しくはなくなってきたが、八千の峰から「飛ぶ」という発想に、脱帽したのだ。

男をジャン・マルク・ボワバンといった。空の散歩の専門家かと思うとそうではない、翌年にはマッターホルン北壁を単独登攀した後東壁をスキーで滑降、さらに頂上からハンググライダーで舞い降りるというトリプル冒険をやってみせた。

八五年にはガッシャブルム2峰(八〇三五)に登頂(ただし、この時メンバーの一人、中野融隊員が事故死している)、初めて八千の峰の頂上からハンググライダーで「下山」という記録を樹立した。正確に言えば、重さ一七のハンググライダーをかつぎ上げた時は風が強くて飛ばず、やむなく頂上にデポ、六日後再度ボワバンがてっぺんまで登り、雪に埋まったハンググライダー

を四時間以上かけて掘り出し、どうにか二五分間の飛翔をなしたのだのである。

その後も道具を駆使しての継続スピード登攀に精力的に挑戦、八六年三月にはモン・ブラン山群で四つの壁を一日で登るといふはなれ技をやったのけた。

当時の記録によると、まずエギーユ・ヴェルトのグラッシー・ルートを一時間半で登り、頂上からパラパントでドロワット北壁取りつきに舞い降り、三時間半で壁を攀じ、今度はハンググライダーでタルト北壁取りつき地点へ降り立った。この壁のスイス・ルートを二時間半で登ると、またまたハンググライダーでグランド・ジョラスへ。四時間半でランスールを登り、最後もハンググライダーでシャモニの町へ舞い降りたのだった。

三七歳になったそのボワバンが、今度はエベレストからパラパントで飛んだ。先月のこのコラムでふれたフランス隊のメンバーとして昨年九月二十六日に登頂、ウェスタン・クウムの第2キャンプまで優雅な飛翔を楽しんだのだ。無論、これまで誰もできなかったことである。ボワバンは、急傾斜の壁でも雪面さえあれば二本のスキーでおりてしまうほどの板の名手であり、また六級の氷壁を単独でスピード登攀する能力のあるクライマーでもある。

壁も雪も滑空も超一流、というこんな山男を登山の流れのどこに位置づけ、どんなふうにとらえたいのか。実際にはヘリコプターの多用など別の問題もあるのだろうが、ともかく彼が取りつきから終了まで可能性を最大限に広げた、新しいスタイルの登下降をやっていることは、確かだ。

(江本嘉伸)

海外の山

かをすかせている皆さんに悪いし、私
もいや。日本山岳会の発展を祈る」
と、会場を沸かせた。

新永年会員には望月達夫、今村正二、
高橋宏一の三氏(略歴別記)。同じく
今西会長から永年会員章が贈られる。

今村正二新永年会員は、「私が入会
した昭和十三年の山岳三十三号をみる
と、会員の増減は九名増、六十二年の
それは百八十名増と、今は隆盛の一途
を辿っている。記事内容も最近海外
での活躍が多く、隔世の感がある。今
後は私なりにクラブライフを楽しみた
い」と挨拶した。

また、今西会長から、多年に亘って
山日記刊行に尽力された、茗溪堂社主
の坂本矩祥氏に、感謝状を贈呈するこ
とが報告された。

この一連のセレモニイのあと、堀田
弥一名誉会員の音頭で乾盃、開宴に移
行。

三十五の円卓には、全国各地の名山
名が付されており、翌日の懇親山行の
ところとなった大楠山も、つつましく
控えていた。

テーブル懇談は、配属された「テー
ブルマスター」の巧みなリードで、そ
の場の雰囲気が大きく盛り上って行っ
たことも、付記せねばなるまい。

宴半ばには、当日出席した三国友好
登山日本隊員、シヴァ登山・トレッキ

随想

三国登山の実り

晩餐会に入る前の短い雑談で、史占春氏から「韓国に
もチョ・オユー登山の許可を出した。いま米中ソ三国の
チョモランマ友好登山の交渉をしている。資金は米、機
材はソ連、中国は山を提供する。インドとは考えていな
い」という初耳の話をきいた(文責・筆者)。これでこ
んどの三国登山が中国側からみると、登山を媒体とした
長期にわたる壮大な外交活動の第一号であったことが、
よくわかった。だから、史占春氏が挨拶の中で、「私は
JACに心からの敬意を表する」とのべたとき、こんど
の大企画の成功に大きな働きをした本会に、本心の礼を
のべたように筆者には感じられた。

一方、私達の方はどうだったのか、三国登山は私達に
目にみえない大きな資産をもたらした。複雑なこの事業
を通じて多数の会員が、通常の遠征では得られぬ実に貴
重な体験を身につけた。これが会の資産でなくて何だろ

通信がとだえて

田部井 淳子

一九八八年夏の一ヶ月間、私は婦人懇談会の仲間とイ
ンドへ山登りに出かけた。シヴァ峰(六一四二呎)をめ
ざす十三人の女性登山隊と、トレッキング隊九人(男性
一名)の合計二十二名。

この年、日本に夏がなかったように、インドもモン
ーンが長引いたことから、大雨が続き、山への道は数ヶ
所で土砂崩れがおき、予定通りには進めなかった。ま

う、と筆者は思う。晩餐会の運営にも並々ならぬ自信が
肌感じられて快かったが、それも三国登山の体験に由
来するものだったにちがいない。JACがひと回り大き
く充実したようにさえ感じられた。それなら私達は南北
両方の得がたい体験の機会と場をJACにつくってくれ
た中国登山協会に、心から感謝せねばなるまい。私達の
側から友好を看板にこんな壮大な登山計画を持ちかける
ことは、先のことならいざ知らず、ちよつと考えられな
いことだから、なおさらそう思う。政治大国中国にして
初めてとり得るイニシアティブだと思ふ。史占春氏が交
渉中の米中ソ三国登山では、中国は山を提供すると述べ
たのを書いたが、一見、当然のことに聞えるこの言葉
も、「友好登山の舞台は中国が提供する。」と読めばニュ
アンスが違ってくる。ともかくこんどの三国登山は、中
国、JAC共に利害が一致し、双方に実りをもたらした。
登山の全体像に日本側からみてちよつと欠けるとこ
ろがあったが、企画の趣意をよく考えてみると気にする
ほどのことではない。(一九八八年十二月 田口)

た、それだけではなく、ここはインドの奥地なのだか
ら、当然都市との連絡は容易につかない。そのため、
二、三日連絡がとれないのはあたり前と思っていた。
ところが、あまり山を知らない報道関係の人は、これ
だけで「田部井さん消息を絶つ」と書くのだ。

新聞の活字の重みを編集者や記者たちは本当に知って
いるのだろうかと思いたくなる。テレビでも、ラジオで
も私たちを行方不明と報じ、家族はもちろん、友人、知
人、私と同行した隊員の家族は、このニュースに肝を冷
やしたという。

原因は、世の中が便利になりすぎたせいだろう。過日

随想

ング隊員が壇上に紹介される。続いて新入会員も登壇。浩宮さまも、今回は先輩会員として、暖かい拍手を贈られた。

テーブルを移っての自由歓談、名山回遊が、この宴のクライマックスであったといえよう。

支部会員紹介のあと、大拍手のなか浩宮さまが退席される。

歓談は尽きることなく果てしないが、やがて終宴も間近いことを感じさせた。

二十時三十分、寸分の狂いもなく閉会が告げられ、出席者一同、名残りを惜しみつつ、またの再会を約し、一九八八年版の山岳、山日記、会員名簿を手、巷に去って行った。

当日の出席者三百六十余名。配布された年次晩餐会のしおりによれば、十一月三十日現在の一番新しい会員番号は一〇三九一。六十三年度(昨年の晩餐会以降)在籍会員数四四二四名。入会者数二〇七名。支部数二一。理事数二〇、監事数二、各種委員会数二〇。

最後に、この年次晩餐会開催にあたって、裏方を務めた総務委員その他各位の労苦を多し謝意を述べたい。

(写真・武居台三/文責・高田眞哉)

【物故会員】

大味精司、岩永安雄、小池文雄、鈴木眞吾、山口弘司、斎藤平七、藤島玄、

随想
放映されたように、世界最高峰からの眺めが宇宙衛星を介してすぐさまお茶の間に流される時代なのだから……

しかし、これが山にも通用すると思われてしまう所にテレビの恐ろしさがある。あれはショーであり、純粋な登山とは言い難い部分かなりある。

私たちがエベレストに登頂したのは十三年前。登頂のニュースは、山頂から登山基地の隊長ヘトランシーパーで伝え、そして登山に同行が義務づけられている現地政府の連絡将校の了解を得て、メール・ランナーに託された。彼に無線がある村まで走ってもらうためだ。

メール・ランナーはゼッタという十九歳の少年。彼は、連絡将校からの「これは良いニュースでありネパール外務省から世界各地に流される重大なものでもあるから、途中の村人には決して話してはならぬ」という命令に忠実に従い、私たちの足で四日間かかるその村まで、なんと彼は脇目もふらずに走り続け、ベースキャンプから十九時間で走り抜き、無線士に伝えたという。

今思うと、なんと純粋な、夢のある出来事だったかと感激を新たにするのだ。

山にいつもロマンを求めるのではないが、はるか離れた世界最高峰のエベレストを前にして、「今夜のメニューは、誰々さんの差し入れによるヤクの肉のから揚げ、

そして夜食は、日本から持参したそうめんです」とか、「某隊員の婚約者がベースキャンプまで登ってきて彼を激励しています」とか、克明に隊員の生活ぶりが報じられると、正直いつてうんざりする。まして苦しい登りの

一步、一步の呼吸音まで、ヘルメットにそなえつけられたマイクでホンでキャッチされると、本当にこれはショードだと思ってしまう。なにかも見せつけるためにカメラがまわる。こんな登山はしたくないなとつくづく思った。

分からない部分があつていい。実際に行動を行なっている隊員たちだけが分かる苦労、楽しみがあるから山登りなのだ。

山に限らず、テレビで報道されたことはみんな真実だと思つている人がかなり多い。「テレビではこう言っていたよ」と、自分の意見を言わない人が増えるのも困る。

なにはともあれ、私は行方不明にはならなかったし、これからも未知の所へ、連絡をこまめにとることなしに出掛けてゆきたい。

(この文は田部井氏の了解を得て全国信用金庫協会の小冊子に載つたものを掲載しました。)

随想
編集

奥井忠保、茶谷東海、織田収、桑原武夫、岡本包夫、平野勲、高橋定昌、浅原重継、大島永明、久保田昭二、水腰英隆、森田茂、竹節作太、吉野良介、加藤喜一郎、兼平治水、多田隆峰、森谷周野、浜野正男、松田武雄、設楽芳夫、清田清、谷博、浜岡透、川森左智子、山県一雄、小島集太郎。

〔名譽会員紹介〕
史占春 (Shi Zhanchun)

一九二八年一月十二日生

中国登山協会主席、一九五六年、ムスターグアタ中ソ合同登山隊、中国側隊長として初登頂。一九五七年ミヤコング中華全国総工会隊長として初登頂。一九五八年、チョモラ

シマ中ソ合同偵察隊、中国側隊長。

一九六〇、七五年、チョモランマ登山隊隊長、一九七五年には女性の潘多が登頂している。一九八〇年にはJACチョモランマ登山隊に協力。

八五年には中日ナムナニ登山隊隊長。一九八八年は、三國友好登山隊の中国側隊長として、今回の登山

を成功に導いた。

クマール・カドカ・ビクラム・シャハ
(Kumar Khadga Bikram Shah)

一九二四年生

トリフバン大学卒、文学士、法学士。英国へ留学する。

ネパールのロイヤル ファミリー。

トリフバン大学ネパールアジア研究センター所長。ネパール山岳協会会長。一九八八年、三国友好登山ではネパール登山隊総隊長として、今回の登山を成功に導いた。

ハリッシュ・C・サリーン

(Harish C. Sarin)

一九一四年五月二日生れ。

一九三七年、イギリス、ケンブリッジ大学数学優等卒業生。

一九三八年、ICSインド、ビハール州に勤める。

一九五四～八一年、ヒマヤン登山学校創設委員(ダーズリン)、名誉書記及び名誉終身会員。

一九六四年、インド登山財団(一九五八年設立)の設立委員。

一九六四～七三年、インド中央政府国防省、国防次官。

一九六四～八二年、ネール登山学校創設委員(ウッタラカシ)、名誉書記及び名誉終身会員。

一九六六年、インド登山財団会長。以来二年ごとの改選では常に満場一

致で会長に選出されている。

一九七三～七五年、アンドラプラデッシュ州知事代理及びグジャラート州知事代理として中央政府から派遣される。

一九七六年～八五年、電信電話通信技術委員長、鉄道委員会委員長。

一九八二年、ジャワハルラル・ウインタースポーツ登山学校名誉書記。

一九八三～八六年、ネパール駐節(ちゅうさつ)駐在)特命全権インド大使。

一九七四年、インドで第二位の階級のバドマ・ビブシヤン(偉大なるハスの花)勲章を受ける。

現在、ヒマヤンクラブ名誉会員、アルパインクラブ名誉会員。

IMF(インド登山財団)は、一九六五年のエベレスト登山隊の成功を始め数々の登山隊を国内で組織してきました。そして今日のインド登山界の興隆を築きました。一九八〇年には人工岩登りもできる、IMFの立派な建物が、故インディラ・ガンジ首相を迎えて開館しています。(サリーン氏については伏見紀子氏の資料を参考にした。編集)

フオスコ・マライーニ

(Fosco Maraini)

一九〇四年、イタリア、フィレンツェに生れる。フィレンツェ大学自然

科学部卒業(専攻は人類学)。山は

ドロミティを中心にティータ・ピアツ、エミリオ・コミチに手ほどきを受けた。一九三七年、第一回チベッ

ト入り。イタリアの東洋学者、ジュゼッペ・トゥッチ教授に同行。一九

三八年、奨学金を得て来日、北海道帝国大学へ留学、アイヌ民族とその文化、人類学的研究にたずさわる。

一九三九年、北大山岳部ペテガリ岳遭難のときは、この山行に参加する予定だったが、子供の病気で数日遅

れ、何も知らぬまま無人のベースキャンプで数日過ごしたことがあつた。一九四一年、京都帝国大学文学部のイタリア語講師に就任。京都の山に登るにもスパイの疑いをかけられるため、いちいち警察の許可をも

らわねばならなかった。一九四三年、第二次世界大戦勃発、反ムッソリーニであったため、名古屋郊外に軟禁される。一九四五年、終戦とともに、家族を連れてイタリアへ帰

国。一九四七年、フィレンツェ大学教授に就任。一九四八年、ジュゼッペ・トゥッチ教授とともに二回目のチベッ

ト入り。

一九五四年、日本山岳会入会。一九五八年、ガッシャーブルムIV峰の遠征(リカルド・カシン隊長)にカメラ

ラマンとして参加。下山のとき、バ

ルトロ氷河で京都大学のチヨゴリザ

遠征隊に会った。一九五九年、ヒンズークシユのサラグラール峰へイタ

リア登山隊の隊長として遠征。

〔著書〕「イタリア山岳家の歌(牧野文子訳)」「ヒマラヤの真珠(牧野文子訳)」「チベッ

ト(牧野文子訳)」「ガッシャーブルムIV(牧野文子訳)」「海女の島(牧野文子訳)」「リ

ーディング・ジャパン」。(マライーニ氏については早川瑠璃子氏の資料を参考にした。編集)

サムエル・ブラヴァント

(Samuel Bravard)

一八九八年五月十八日、父、サムエル・ブラヴァントと母、マルガリータ(旧姓ルビ)の間に生れる。出生

地グリンデルワルト。父は一九〇二年八月ヴェッターホルンで落雷によ

り死亡、母は一九〇五年に父の弟のペーテル・ブラヴァントと再婚す

る。ペーテルも父と同じように山案内人であり、小規模の農業を営んで

いた。一九一八年秋、サムエル・ブラヴァントはグリンデルワルトで小

学校課程四年、中学校課程五年を終え、四年間、師範学校で学び、グ

リンデルヴァルトで教員となった。一

九一九年、ベルン州の山案内人資格を取得、一九一九年から一九二〇年

にかけての冬、横有恒氏にドイツ語

を教える。山案内人としての仕事は休暇のときだけ行なった。

一九二一年秋、アイガーのミッテルレギ稜を初登攀する。

一九二六年、秩父宮殿下との山行。

一九二七年、松方三郎、浦松佐美太郎両氏とアイガーヘルンリ稜の初踏破。

一九二七年、グリンデルヴァルトの副村長

一九三三年、ベルン州議會議員

一九三五年～四七年、国民議會議員

一九三九年、田口兄弟とともにグロス・シュレックホルンを北東壁から山頂まで初登攀する。この年、山案内人を止める。

一九四七～六二年、ベルン州政府の建設・鉄道担当大臣。

一九五〇～五一年及び一九六一～一九六二年、ベルン州政府プレジデント。

一九六二年、ベルン大学より名誉博士号を贈られる。

一九六二～六八年、ベルン山岳鉄道（ベルン・レッツチベルク・シンプロン鉄道）役員。

一九六六年～六七年、国民議會議員。

一九六八年、すべての公職から引退。（ブラヴァント氏から送られてきた資料を抄訳した。編集）

広瀬潔（九三一番）

明治二十九年十二月八日生。入会は一九二五年で、紹介者は高野鷹蔵、中山益太郎。

明治末から関東地方の山、大正末からは北アルプス諸峰の特に穂高連峰に親しむ。昭和十四年三月、富士山の剣ヶ峰からスキーによる滑降。気象庁内に山の気象研究会ができたときの初代会長。日本雪氷学会では常任理事や雪崩委員長を務め、スキー場雪崩防災研究会会長なども務めた。大正十一年東京帝国大学政治学科卒業後、三井銀行に定年まで勤務。

初見一雄（一三九六番）

明治四十二年一月一日生。入会は一九三二年で、紹介者は田口一郎、松方三郎。

昭和初期より八年まで四季を通じ穂高連峰に登る。昭和九年より北海道の日高山脈、中央高地の登山。同十年北千島アライト山登山。同十一年より約十ヶ月を費やし南樺太中央山脈、東北山脈の登山、および調査をなす。昭和八年日本大学、昭和十二年北海道大学農学部卒。著書に「少し昔の話」（名溪堂刊）

関根吉郎（一四六九番）

大正四年八月四日生。早稲田大学卒。入会は一九三三年で紹介者は木村恵吉郎、角田吉夫。

昭和十一年西冠帽峰、同十三年新高山東北稜、同十五年明神岳東稜より前穂高、奥穂高。同二十八年アコンカグア、同三十三年キリマンジャロ、キボ峰。

辰沼廣吉（一九五三番）

大正五年一月一日生。慶応義塾大学医学部卒。入会は一九四一年で、紹介者は三田幸夫、早川義郎。

穂高岳、剣ヶ峰を中心に日本アルプスで活躍した。台湾の玉山にも二回、登っている。本会のマナスル遠征では第一次、二次、三次に参加している。昭和二十六年から四十四年にかけては何回か本会の理事を務め、四十三年から五十九年までにも数回本会の評議員を務めている。毎日スポーツ賞、朝日賞受賞。

「名譽会員となった感想」

「目下世界的に異常気象なので、登山家は特にその点注目して、安全な山行を期せられたし。」

「初見一雄氏

「喜びと感激の気分です。」

「関根吉郎氏

「山の友人も一人去り、二人去るという年になりました。さびしき限りです。」

「辰沼廣吉氏

「長い間御世話になりました。」

〔新永年会員紹介〕

望月達夫（一七三九番）

大正三年三月九日生

東京商科大学卒

紹介者 吉沢一郎、黒田孝雄

今村正二（一七五八番）

大正二年一月七日生

早稲田大学卒業

紹介者 灘波清一、鈴木正俊

高橋宏一（一七六三番）

明治四十五年五月四日生

東北帝国大学卒

紹介者 中村謙、岡田喜一

〔永年会員となった感想〕

望月達夫氏

「日本山岳会での五十年は、自分のさやかな人生をかえりみると、ひじょうに大きな重みを感じます。」

今村正二氏

「無為のうちに五十年が過ぎたようです。」

高橋宏一氏

「大学在学中は身を挺して山岳部の再建に努力すると同時に、あらためて東北の山々を無雪期と積雪期に登山して、記録を整備しました。岩登りも指導者がありませんので、前穂高で仲間だけで研さんしました。当時その仲間たちとの話題はいつかスイスアルプスに登山したいということでした。当時はヒマラヤはまだ話題になりませんでした。」

した。その時から約五十年経った数年前に、当時の仲間の鈴木稔、佐々篤夫両君と女房を連れてスイスアルプスに遊び、ユングフラウに行き、マッターホルンの中腹の国境の大雪原をあるいて、希望を達成して涙を流したことは一生の喜びです。」



図書
紹介

北八ヶ岳の黒い森から

—ソフィア・ヒュッテ物語—

千坂正郎著

副題が示すように、この本は上智山岳会が中心となって建てたソフィア・ヒュッテをめぐる物語りである。この小屋の建設にたずさわった著者は、五十年前その小屋にかかげられた板に、焼け火箸で書かれたゲーテの詩「漂泊者夜の歌」を眺め、ゲーテがこの詩を書きつけたキツケルハーンの小屋に五十年後、再び訪れ、若き日の自分を想う場面を偲び、著者はこの「北八ヶ岳の黒い森から」の話を進めていく。

《自然保護随想》

イエローストンの山火事

昨年(一九八八年)の夏、北アメリカは旱魃で、ミシシッピ川の水量も四分の一に減り、中西部では五月から九月上旬にかけて、雨が一滴も降らない日が続いた。同じ頃、イエローストン国立公園の山火事が伝えられ、気になっていた。

たまたま九月上旬から中旬にかけて、アメリカ、カナダの国立公園の視察にでかけた知人に、山火事の様子を聞く機会を得た。生の情報としてお伝えしたい。

イエローストンは一八七二年三月に世界最初の国立公園として指定されたことで有名だが、位置は中西部ワイオミングとモンタナの両州にまたがり、面積は約九十万ヘクタール、日本で一番広い大雪山国立公園の二十三万ヘクタールの四倍もあり、人が入れない地域も多い。過去に何度も山火事に見舞われているが、今度の山火事が最大のものという。

国立公園の指定から百年目に当たる一九七二年までは山火事が発生する度に、出来るかぎりの消火活動をしてきたが、百年祭以降は「あるがままの自然にまかせよう」という姿勢に政策を転換した。百年祭以降、小さい山火事はたくさん発生しているが、殆どは自然に鎮火していた。今度の山火事は、五月中旬からの旱魃が、最大

の原因だが、七月から八月にかけて雨が降らないまま、落雷によって五ヶ所から自然発火して、大事に至った。イエローストン周辺の森林は、ロッジポールパインという日本のトド松に似た松が殆どで、ほかは樺などの針葉樹である。今度の火事で百万エーカー近く焼けたが、一面の焼け野原という無残な姿ではなく、知人が九月にいった時には、まだチロチロと残り火が燃え、半焦げの木も多かったという。

今度の山火事には、アメリカ全土から八千人のボランティアが集まって、人命救助などの応援に駆けつけていたが、消火活動はロッジやキャンプ地周辺に限られて、山火事の大部分は、そのまま手を付けなかったという。森林は丁度、天然更新の時期にきていた、という判断もあった。

公園管理者によると『今度の山火事は悪いことばかりではない。パインは悠久の時を経て、山火事に適応して進化している。パインの松輪は通常の温度では開かない。山火事になって高い温度にあうと、初めて開いて飛び散る。また種子も高温にあわないと発芽しない。今度の山火事で、肥沃な土地が生れ、新しい生命も育まれる』ということだ。動物たちも『ほとんど逃げのびたろう。しかし冬にむかって、草食動物たちには厳しい季節となるが、特に救済しない。人の手を出来るだけ加えない。すべて自然のまま、が彼らの国立公園管理と運営の哲学なのであろう。』

(関塚貞亨)

小屋の名前の由来、小屋の周囲の地名、植生、地形などに触れ、小屋にそなえつけのヒュッテンブーフをめくりながら、数十年前と比べ、過ぎ去った

次代に残そう美しい山と溪

青春を回想していく。そして最後は、学徒出陣で帰ることのなかった友を偲ぶ、ソフィア・ヒュッテの仲間の歌と、詩「旅の終りに」でこの本をしめくくっている。

これまで形而上的文を綴ることの多かった著者を知る者にとっては、晩年(八十二歳)のゲーテがボアスレーに宛てた手紙「私はヒュプシスターラーという宗派のことを聞きました。…その唱えるところは、彼らの知る最上のもの、最も完全なるものを貴び、讚美し、うやまい、それが神性に近い関係にある限りにおいて、それを礼拝するということです。…私はヒュプシスターラー教徒の資格を得るために終生努力してきたことを感じます」の部分を感じさせる。

千坂ファンにとっては見のがせない本であろう。

一九八八年四月、東京新聞出版局刊、二四〇頁、定価一五〇〇円

(岡沢祐吉)

新・日本百名山

山と溪谷社編

ヤマケイ・グラフィック・88・1と

うたっているだけに写真集である。中心は題名の『新・日本百名山』だが、それにまつわる話題を周辺に配している。まず、レイアウトが凝っている。表紙裏と裏表紙表には相撲の番付表よろしく「新・日本百名山標高順位表」が麗々しく掲げられ、折り込みでカラー写真、ランドサット画像による日本列島の中に百名山の位置を示している。ついで、最近百名山マニアになられた浩宮様のご自身の撮影による写真と岳友内田潔氏による話題が巻頭を飾っている。

さて、肝心の新・日本百名山だが、全国を北海道から九州まで五ブロックにわけ岩橋崇至氏ら二四名の山岳写真家によって写しわけられていて、いながらにして名山を楽しめるみな素晴らしい。

い出来ばえだ。

この百名山の選定に当たったのは坂倉登喜子、望月達夫、三宅修、美坂哲男、横山厚夫の五氏である。選定の基準は、①独自性②形状の美しさ③登山の対象として楽しい山であること、の三点で、深田さんの山の品格、歴史、個性とやや違っているだけに深田百名山とはかなり違った山が選ばれていて面白い。具体的に山名をあげるだけの紙幅はないが、なる程と思われるものもあれば、どうか? と首をかしげたくなる山もある。

「父・深田久弥と歩いた百名山」(深田森太郎)、「百名山と深田さんの思い出」(望月達夫)も深田さんのエピソードを知る上で貴重なものである。あとに続いて「私の百名山」エッセイ五篇があるが、田中辰二氏を除いて、それぞれ著名人ではあるが、百名山完登者でないのがやや弱い。それは「この書を手がかりにして自分の百名山をもつて欲しいと思います」ということな

のだろうか。

巻末は「新・日本百名山をめざす高登山者のために」のアドバイスを岡部紀正(医療)、平本ふく子(食糧)、大久保忠男(装備)、油谷次康(ルート)の各氏が専門家の立場から行なっているが、なかなか有益な資料だと思う。

一九八八年四月 山と溪谷社刊、A4版 一五四頁 定価一八〇〇円 (小倉 厚)

大イワナの滝壺

白石 勝彦著

岩登りから転じて凄まじい程の情熱を込めて源流の大岩魚を求めた青春の記録である。

著者は、屏風岩へ岩登りに行く途中の横尾谷で岩魚釣りに初めて出会ったとき、登山への情熱を支えていた彼の「世界」に漠然と岩魚が入り込んできたという。

そして、著者にとって運命的とも言える出来事、心臓弁膜症の手術を受けることになり、その療養期間中に、彼が漠然と彼の「世界」を刺激していたものが何であったかを、そのときに読んだ本、ハイデッカーの「存在と時間」によって知ったという。

一線を越えた登山は無理な身体にな

ウッドシャフト・

ピッケル二村のこと(下)

安藤 忠 夫

構造上で工夫した一つに、シュピッツェの金属部が七・五センチだけ木部に入れている。山内などに比べて相当

長くしているが、これは、ピッケルの折損がハネスに近いシャフト部で折れることを解決したものである。

ウッドシャフトについては、木がダメでメタルが絶対というのではなく、昨今のメタル万能の風潮はおかしい。むしろ、木の衝撃を吸収する力、強靱さなどは、メタルにはないものである。逆にメタルは折れるか、そうでなければ抜けることがある。

ウッドシャフトビッケル二村のこと (下)

そのシャフトは、元来ヨーロッパのホワイトアッシュが最高であるといわれ、国産では北海道のタモ(トネリコ)が多く用いられている。が、二村では北アメリカ産のヒッコリーを使っている。これについては、自分は昔からスキーの心得があり、ヒッコリーに対する知識を持っていたことによる。堅くて、粘り強く、打撃のショックをよく吸収してくれるという点で、これに勝るシャフト材はないと思っている。難点といえば、いくらか重いということであろうか。

現在の製作番号は、一、九六三番ということになっている。うち四の数字が抜けているので、実際は一、六〇六四本を鍛えたというから、ほぼそれに近くなった。

長谷川(恒男)モデルについては、最初、図面だけをお願いして製作した。氷壁用であり、ビッケルの側肉を落として軽量にした。カラビナ操作穴以外にも、ビッケル寄り五つのところに小穴がある。これは氷壁に打ち込んだときの逃げを防ぐためのものである。さらにシユピツェにも同様に小穴を設けた。シャフトの長さは、ビッケルで五三と六三、バイルは四〇、ハンマーは三三である。

かつて自分は、農具を作ったり、SUP鋼という自動車用バネを使って亜炭採掘用のツルハシを作っていたが、ビッケル製作にはこのときの技術が生かされていると思っている。また基本的には、このビッケルで儲ける意志はない。日頃はトヨタ自動車側の仕事を請け、これで食べているのが実態である。したがって、トヨタの仕事が入った時はそれにかかりきりとなる。ビッケル製作は、注文数量がある程度まとまったとき鍛えることにして、多いときで月五〇〜六〇本ほど鍛えたことがあつた。

た。

今ではビッケルの外に、余技としてナイフ、ナタ、包丁なども作っている。ただ、ビッケル製作には、殊の外に魅かれるものがある。日本人的発想だろうか、登山家の魂ともいわれるビッケルだから、機能を重視し、個性を大事にして、一本ずつに心を込めて製作したい。また、使い捨てにしたいくないという事から、量産態勢については今後も考えない。

将来、息子が父よりも更に良いものを、という開発精神を持って続けるならば、この仕事を引き継がせてもいい。いずれにしても私自身は、七十歳を越えるまで仕事をしたいと考えているので、今はボケないように努めている。

*

と、ご多忙にもかかわらず、お仕事の手を止めて筆者の求めに応え、快くお話をいただいた。なお、二村さんの本名は善市といわれ、昭和六年三月三十一日生まれとのことである。先の昭和六十一年三月、および昭和六十二年四月の二回、重病で長期にわたって入院されていたが、このほど、再び仕事に携わるまで回復されたとのことであった。これからさらに一層の健康を取り戻され、末永くにわたってビッケル作りの名匠・二村の名を世に問うていただきたい、とお願ひして夕闇せまる梅坪駅へと急いだ。なお、筆者が持つ二村・ビッケルは、頭部二九、シャフト部七四、重量〇・八六キログラムであってフィンガー内側に前記の製作者銘が、フィンガー外側に製作番号と発注者たる筆者の名前が刻まれている。また、かつて『山と溪谷』(昭和四十一年五月号、昭和四十二年四月号)誌上で、この『二村・ビッケル』について議論がなされたことがある。

(終)

ウッドシャフトビッケル二村のこと(下)

ってはしまったが、漫然と日常性の中に埋没することなく新たな「世界」を求め、岩登りで習得した技術により、源流の大岩魚を求め始めたのだ。それは、著者にとって高さへの極みから、山の深さ(源流)への挑戦であった。北アルプスの梓川から始まった著者の源流の大岩魚への遡行は、朝日連峰、南アルプス、日高山脈、知床半島、飯豊連峰、そして再び日高山脈と続き、厳しい登山にも匹敵する激しい釣り、当時の源流遡行を「一〇メートル先には滝が現れるのか、大ゴルジュ帯になるのか皆目見当がつかず、不安な思いで谷を遡行して行ったけれど、私の眼は未知なる世界への興味で、らんらんと輝いていた」と回顧している。

庄巻は、日高山脈の静内川の釣りで、絶壁で転落したにもかかわらず更に源流へ進み、ヒグマの影を背中に感じつつ幻の七〇もある大岩魚に出会う場面である。

ただ、この本で気になるのは、日常性の中に埋没することを拒否した著者が「あのイワナがいた滝壺こそ、私の溪流釣りの頂点であり、これ以後の私の溪流行は、すべて、あの頂点に達した瞬間への限りなき回帰でしかなかったのである」と結んでいることだ。

一九八八年五月、山と溪谷社刊、二

四〇頁、定価一二〇〇円

(角田啓蔵)

ひとりぼっちの

日本百名山

佐古 清隆著

著者は二十八歳の時から始めた二七回の登山の中、二四四回が単独行で、完登百名山については、八八山が単独行でなされている。

同著者によって一昨年七月に出版された「ひとりぼっちの山歩き」(山、五〇七号で紹介済)は、計画から下山までの単独行のための幅広いガイドブックであったが、この「百名山」の方は、著者の登山記録の中から特に深田久弥氏の「日本百名山」だけを集めた、初期の石鎚山から最近の雨飾山に到るまでの、生々しい山行記録である。喜びも、失敗も、危険も、不安も同居した、著者のつつみかくさない生の登山記録そのものである。

この百名山は、単に著者の青春のモニュメントであるだけでなく、「日本百名山」にある山々を目指す多くの登山者にとって、座右の掛け替えのないガイドブックになるだろう。

読み進んで行く中に、著者の山への愛情が脈々と伝ってきて、親しみが湧く。すでに登った山々は懐しく想い出

され、未踏の山々は、山行へのすばらしい指針となる。

なお付録の「日本百名山」完登のためのアドバイス編は、最新コースタイムとコメントが有益で参考になる。また、「日本百名山」の本文の上段の空白は、登山者のメモ書き用に適している。

一九八八年八月、山と溪谷社刊A5判、二五四頁、定価一二〇〇円

(渡辺 徹)

雲取山に生きる

新井信太郎著

奥秩父の雲取山荘の管理運営を続けている著者が、山荘開設六〇周年を機に、たどってきた自分の足跡を見つめ、一冊にまとめた。

序文にもあるが、山小屋管理者で、しかもそれが本会員でもある者が本を出すといった例は少ない。とくに、山の雑誌などに発表されたものをまとめたものでなく、この本のために書き下したものが多く、これはユニークな本だと思ふ。

武州雲取山という、およそアルペン的な匂いのない山が中心であるため、アルプスやヒマラヤなどに目の向く者には興味の少ないものかもしれない。しかし、昭和三十年以降の岩登り万能と

いえそうな風潮のなかで育った著者が、穂高岳から離れ、雨水の洗礼を受けた谷川岳の岩場から離れ、かじ屋に作らせたボルトハーケン、アイスハーケン、ハンマーなどを次々と捨て、そして日本のしがらみをくぐり、風雪にさらされる小屋を、あるときは一人

報告

シヴァ峰登山および

トレッキング報告

婦人懇談会

インドフェアの一環として計画されました婦人懇談会主催のシヴァ峰(一四二四)登山及びトレッキングは無事終了しました。登山隊十三名、トレッキング隊九名という大部隊でインドの山と花と人とハプニングを充分に楽しんできました。

途中、当事者たちが知らぬ間に「行方不明か？」と報じられ、留守本部の方には大変な心労をかけてしまいました。あまりに発達しすぎた情報化の誤算でしょうか。

インドの山奥にまだNTTは進出しておりませんが、この報道に肝を冷やした方々が多数いらっしゃったことと存じます。

なぜこのようなことが報じられたかの要因は、この会報の「通信がとだえ

で守って三十数年、多くの人たちから親しまれるような人柄に成長してきた過程には、山に登ることの好きな者にある種の共感を抱かせるだろう。

一九八八年七月、実業之日本社刊、二六四頁、定価一七〇〇円

(岡沢祐吉)

て」および十二月三日に完成いたしましたシヴァ峰報告書(送料共一五〇〇円で、申込みはJAC婦人懇談会宛です)に載っております。ぜひご一読下さいませ。

IMF設立30周年記念を祝し婦人懇談会としてスタードーム型六人用テント一式を贈呈し大変喜ばれました。これを契機に世界各地の山々へ婦人懇談会の足跡が残ってゆくことを心から願っています。

この登山、トレッキング隊に寄せられました数多くのご好意に対しこの誌上をお借りして深く御礼申しあげます。本当にありがとうございます。

(田部井淳子)

*

(隊長失格の記 黒石 恒)

婦人懇談会主催の、トレッキングの隊長を仰せ付かったものの、五月末日まで隊員は未定、従って合宿も出来ず。出発直前に、打合せ会を一度持ただけ、成田で初顔合せの人が三名もあり、これでは、旅行社の募集するトレッキングと何等変りはない。では、私の役目は添乗員だと思え、あまり面倒見が良い人間ではないから、こまめに、隊員のお世話など出来るはずがない。えらいことになったものだと思っただが、この期に及んで逃げ出したとあつては、無責任の誇りは免れまい、ええままと、腹をくくって家を出た。

成田空港で驚いたことに、その添乗員の役目を、登山隊長の田部井さんが、手際良く片付けてゆかれ、私は、あつてからんとそれを眺めていた。現地に行ってもそれは変わらず。肩の力が抜けて、隊長の職務も忘れ勝ちになるような、のんびりした日々を過ごさせて頂き、実に有難く、感謝していた。

ところが、田部井隊長は、そのように細々と気を配られるのが原因で、不眠に悩んでられることを知り、自分の迂闊さに恥じ入ると共に、隊長失格もいとこらだ、以後、田部井隊長を見習わねばと深く反省した次第です。

また、私が最も心配したチームワークも、参加された隊員各位は、夫々、良識ある方ばかりで、トラブルを起こすどころか、放りっぱなしでも、隊はちゃんと纏っていた。尤も、この方は、副隊長の小山さんが、陰で、こっそり骨を折って下さったらしいフシがある。

こうしてみると、私は、今回のトレッキングに、一体、何をしに行ったのかと、つらつら惟みるに、どうも、下痢の患者の治療をしに行ったとしか言いようがない。隊のお役に立ったことといったら、それくらいしか思い当ることが無いからだ。

小野幸さんを囲む会

資料委員会

昭和六十三年十一月五日、本会ルームに小野幸さん(会員番号一八三八)を招き、山の資料についてのお話をうかがった。「木暮碑以前」(山岳第八十二年)、「石井鶴三先生のこと」(山岳第六十八年)などを発表されている小野さんであれば、おのずと古きよき時代の奥秩父の山々や、それらをめぐる人々との交流の談義に話の花が咲いた。

甲武信岳の山名は、拳の形に似ていることによって名づけたもので、「甲

武信」という漢字は宛て字に過ぎないだろうといわれる。これは「甲斐・武蔵・信濃の三国境界に当たっているの」で(「コンサイス日本山名辞典」という説への反論にも相当する)。

山の絵画について、故山川勇一郎さんの作品は拔群だと力説された。それではプロと素人との相違はどこにあるのかとの問いに、鳥のはばたきを、その場で描くのが素人であり、一週間後でも思い出し、正しいデッサンで描けるのがプロだと言われた。

資料の収集・保存については有益な示唆を受けた。ウェストンを例にあげられて、案内した人の話を調べることの意義も強調された。つまり、ガイドの事蹟についても登山史に載せるべきだとのこと。戦前の北アルプスのガイドは試験にパスした有資格者が当っていたが、彼らが持っていた証明書が見つかれば資料的に貴重だと説かれた。

外部に出ている『山岳』の古い原稿を今もお持ちであつたら山岳会へもどしていただければと指摘。これらを保存することの意義についても強調された。

参加者 井沢信久、岡野修、織田沢美知子、坂倉登喜子、砂田定夫、高田真哉、中村純二、平柳一郎、松田雄一、田畑真一

(文責・田畑真一)

晩秋の尾瀬山行報告

自然保護委員会

自然保護委員松丸氏の立案で集委員会会の協力をえて十月二十九・三十日と尾瀬山行は予定通り実行された。

貸切バスで新宿駅西口を午前七時に出発、戸倉で現地バスに乗り換えて雪の舞う鳩待峠を十二時に歩きだす。

戸倉のロッジ長蔵の岡本さんを先頭に滑りやすい木道を慎重にすすむ。

幸いなことに尾瀬ヶ原の途中からは、うしろに雪で白く斑に色彩られた至仏山、前方には燧ヶ岳も望むことができた。宿泊場所の第二長蔵小屋には十四時三十分到着、夕食まで各自の部屋でくつろぎ、入浴夕食後食堂で十九時から二十時三十分まで松丸氏の司会で懇親会をもった。

参加者全員の自己紹介のあと、長蔵小屋の平野紀子さんにも出席していただき、尾瀬はシーズンには混んで困るとの声をよく聞きますが、その時にこられた皆様は被害者であると同時に加害者でもあるのですとの挨拶があった。

そのあと自然保護について(1)山道におけるテープによる道しるべについて(2)歩けない人にも自然の雄大さを味わってもらえるロープウェイの建設、の

是否について参加者から意見を述べてもらった。

一夜明けた三十日、一晚中降りつづいた尾瀬の積雪は四十センチにもなり、木道は完全に埋まってわからない状態になっていた。

集会委員長の神山氏の決定で鳩待峠に戻ることに、第二長蔵小屋を午前八時十分に出発、小屋から二名の方

追悼

小島隼太郎さんを偲ぶ

『主人が倒れた時、机の上には開かれたままの山の本がありました。』

仰天した私の目に庭で木の実を啄む小鳥の姿が見えました。野鳥好きの主人が鳥に食べさせるため育てた木に今年始めて実がつき、小鳥が喜んで食べていたのです。印象的でした。小島隼太郎さん（鳥水氏長男）が倒れた時の様子を雪子夫人がこう語ってくれた。

晩年、父・鳥水氏の書簡を通じて山岳史を調べていた隼太郎さんは読書、書き物、散歩の日常だった。鳥水全集月報七に鳥水の未発送書状を読んで等執筆していたが、山好きの息子ならではの鳥水研究だった。

鳥水は金釘流名筆だと自称していたそうだが隼太郎さんも独得な書体で葉書一枚に六百字くらい書く特技をもっていた。

隼太郎さんは明治四十一年十一月十二日、横浜生れ、横浜二中から青山学院高等部商科入学、山岳部入部。昭

々が道案内に先頭を歩き、ラストは平野紀子さんがトランシーバーで逐次戸倉と連絡をとりながら吹雪の尾瀬ヶ原をすすむ。

バスの通わぬ鳩待峠から更に車道を津奈木橋まで歩き、そこから二台のマイクロボスに乗り戸倉のロッジ長蔵でぬれた衣服を着替え、休息後ロッジ前から貸切バスに乗り、新宿駅西口には

二十時十分に到着、無事山行を終えた。

今回の山行では第二長蔵小屋と戸倉のロッジ長蔵では大変お世話になった。

長岡から現地参加された岩下さん三名を含み参加者三十二名であった。

参加者・順不同 横溝修一、若林修二、高橋詢、赤松光、高橋恭子、荒井

和七年の卒業だ。

関東学生登山連盟、華やかなりし頃で、今まで静観的な山登りをしてきた青山の山岳部も小島隼太郎、松尾敏夫（故）等上級生のリードで岩登りや積雪期登山等、近代登山へと脱皮していった。新入生だった私も驢尾に付して引廻わされた口だ。

昭和五年七月に、当時未登の谷川岳一の倉沢二の沢、翌年十月には本谷、とケルンをつみ、積雪期に鳥帽子、甲斐駒、仙丈などに足跡をのこした。

物珍しさか、青学と言えは谷川岳と言われるのが嫌いで、山岳部室の壁には長谷川伝次郎さん撮影のナंगा・バルバットの南壁やアルプスの地図をはり海外登山の夢を私達後輩に語るのだった。

正金銀行北京支店で終戦、東京銀行でリタイヤ。その後、私ともどもヒマラヤトレッキングをしたり、鳥水氏の足跡を追ったり、有明の山案内の墓参りにいったり思ひ出はつきない。

昭和六十三年九月七日、茅ヶ崎長岡病院にて急性肺炎にて死去。

英光院良泰隼應居士享年八十。

（大倉 寛）

晩秋の尾瀬山行 63・10・29～30

（集会委・自然保護委共催）

凍てそめし池塘に浮葉彩つくす
地吹雪に抗ふ紅やななかもど
至佛岳忽ち失せて雪風す
風雪に鳴るは乾びし黄菅の実
深雪に沈みし木道踏みはづす

（小林碧郎）

・会務報告

十一月理事会

十一月九日午後六時三十分

場所 本会ルーム

出席者 今西会長、大塚副会長、早坂、浜口、織田沢、太田、大橋、橋本、岡沢、大森、勝山、関塚、新井、松永各理事、山野井、松田各評議員、太田監事

委任 村木副会長、鳴原、鈴木、西村

各理事、小倉評議員、山本監事
審議事項

* 名誉会員承認の件

史占春、H・C・サリン、クマール

・カドカ殿下、S・ブラヴァント、フ

オスコ・マライーニ、広瀬潔、初見一

雄、関根吉郎、辰沼広吉以上、評議員

会の推薦する九氏 承認

* 表彰に関する件

長年にわたる「山日記」発行の功労に

対し、若溪堂の坂本矩祥氏に感謝状を

贈る 承認

報告事項

* 本年度永年会員は望月達夫、今村正

二、高橋宏一の三氏

* 本年度上期の中間監査報告

十一月十七日、本会ルームにて橋本理

事、太田監事、事務局杉山同席、なお

山研、三国登山については後日行う

* 総務：名簿の作成状況と晩餐会の準

備について

* 山岳：山岳総索引作成状況と「山

岳」配布について

* 図書：十月二十二日土曜日第二十一

回図書交換会開催 出品数二百五十七

冊 売上高一五九、九九〇円

六十三年度上半期寄贈図書九十四冊

市価換算四四五、一六〇円

* 山研：十月二十九日閉所 利用状況

九月七十三人 十月六十四名

* フィルム：十月二十五日講演会「映

像の変遷」開催 参加二十四名

* 資料：談話会「山の資料について」

参加十一名

* 婦懇：十月十七日シヴァ峰登山・ト

レッキング隊報告会 参加五十五名

十二月十日忘年会開催

* 自然保護：十月二十九、三十日尾瀬

自然探索山行 参加三十三名

* 科学：講演会予定「チョモランマ登

頂時の気象」について

* 学生：来春のクスム・カングル登山

計画について

* 十一月十七日明学大チャラギール峰

登頂報告会 共催海外委員会

* 集会：十月二十三、二十四日「大源

太山」現地小集会報告

* 青年：十一月三、六日「訪韓登山

隊」報告



(11月)

4日 総務委

5日 小野幸さんの話を聞く会

9日 理事会

10日 婦人懇談会

16日 山研委員会・三水会

17日 チャクラギール報告会、図書委

18日 科学委

21日 総務委、会報委

24日 海外委、フィルム委

限定版
(ナンバー入り)

白旗史朗 ネパールヒマラヤ写真集 THE GREAT HIMALAYA



岳人500号記念出版

■ 著者サイン入りオリジナルプリント付き
■ 画期的なB3判片面刷りオールカラー

発売中!

特別定価34,000円
(1989年5月31日まで)

定価38,000円

東京新聞出版局 (中日新聞) 〒108 東京都港区港南2-3-13 ☎(03)471-2211代振替/東京5-5497
書店で発売中。東京新聞・中日新聞販売店でも取りつぎます。

図書受入報告

図書委員会

昭和 63 年 9 月分受入図書

1. 川口久雄著「山岳まんだらの世界」名著出版 昭和 62 (購入)
2. 岡田博校訂「富士山真景之図」名著出版 昭和 60 (購入)
3. 新井信太郎著「雲取山に生きる」実業之日本社 1988 (版元寄贈)
4. 山と溪谷社編「名峰たちの四季」山と溪谷社 1988 (版元寄贈)
5. 宇都木慎一編「探検と冒険 第4集下」宇都木慎一 1988 (編者寄贈)
6. 加藤孜著「連盟と共に」加藤 孜 昭和 63 (著者寄贈)
7. 加藤孜編「国鉄岳連中国親善登山報告」国鉄山岳連盟 昭和 57 (編者寄贈)
8. 長津葛尾 大田弘著「植生」朝日町 1983 (長津葛尾氏寄贈)
9. 足立眞一郎著「山旅素描」新ハイキング社 昭和63 (版元寄贈)
10. 酒井昭市著「飛騨の山 美濃の山」山と溪谷社 1988 (著者寄贈)
11. 飯田睦治郎著「すぐ役立つ山の天気の見方」東京新聞出版局 1988 (版元寄贈)
12. 神戸大学山岳会・山岳部『山と人 14』神戸大学山岳会・山岳部 昭和63 (版元寄贈)
13. 群馬県山岳連盟編「群馬の山 1・3」上毛新聞社 昭和 63 (版元寄贈)
14. スイス山岳研究財団編「マウンテン・ワールド vol. 8-19」小学館 昭和 62~63 (版元寄贈)

10 月分受入図書

1. 今関六也等編「山溪カラー名鑑 日本のきのこ」山と溪谷社 1988 (版元寄贈)
2. ジョン・マクフィー著 越智道雄訳「アラスカ原野行」平河出版 1988 (版元寄贈)
3. 後藤昌美著「北海道の自然 1 四季の彩」淡交社 昭和 63 (版元寄贈)
4. 工藤勝彦著「北海道の自然 2 聖誕」淡交社 昭和 63 (版元寄贈)
5. 表優臣著「北海道の自然 3 釧路湿原」淡交社 昭和 63 (版元寄贈)
6. 成松岳人著「北海道の自然 4 大雪の四季」淡交社 昭和 63 (版元寄贈)
7. 兼本延夫著「北海道の自然 5 日高山脈」淡交社 昭和 63 (版元寄贈)

8. 「DAS EDELWEISS II」関西学院大学山岳部 1958 (南井英弘氏寄贈)
9. 牧野四子吉・文子回想文集編集委員会編「にどだもれ回想牧野四子吉・文子」牧野四子吉・文子回想文集編集委員会 1988 (酒井道雄氏寄贈)
10. C・アレン著 宮持優訳「チベットの山」未来社 1988 (宮持優氏寄贈)
11. C・アレン著 宮持優訳「チベットの山」未来社 1988 (版元寄贈)
12. 畑 正憲・C・W・ニコル著「森からの警告」C・B・S ソニー出版 1988 (版元寄贈)
13. NHK取材班著「秘境興安嶺をゆく I・II」日本放送出版協会 昭和 63 (版元寄贈)
14. 牧野和春著「森林を蘇らせた日本人」日本放送出版協会 昭和 63 (版元寄贈)
15. 白鳳会編「白鳳 第6号」白鳳会 昭和 63 (版元寄贈)
16. 三省堂編修所編「コンサイス鳥名事典」三省堂 1988 (版元寄贈)
17. 江本嘉伸著「鏡の国のランニング」窓社 1988 (版元寄贈)
18. Todd Swain "The Gunks Guide Alpine Diversions" 1986 (Neil Sloane 氏寄贈)
19. "The Mountains of Central Asia" Royal Geographics & Mountain Everest Found 1987 (購入)
20. Jill Neate "Mountaineering Literature" Cicerone Press 1986 (購入)
21. Harka Gurung "Vignettes of Nepal" Sajha Prakashan 1980 (著者寄贈)
22. Harka Gurung "Maps of Nepal" White Orchid Books 1983 (著者寄贈)

山口弘司
(九八四八)

88
・ 5
・ 11
・ 6

東京経済大学体育会山岳部(七四〇四)

深見章(四五九三)

退会

会員異動
11月

11月来室者34名

29日 自然保護委

28日 総務委

25日 高所登山委



☎ 234-6659

この電話で
もお知らせ
しています

●高橋(今井)通子さんと

山を語ろう

肩のこらない談話会「この人と山を語ろう」シリーズも会を重ね、今回はヒマラヤへそしてパラパントでも活躍の高橋(今井)通子さんをゲストにお招きします。皆様ぜひおいでください。

日時 二月二日(木) 午後六時半
場所 日本山岳会集會室

婦人・青年懇談会共催

●イタリア山岳会杯

第九回ヴァルフルヴァ

国際山岳スキー・ラリー

「イタリア山岳会ヴァルフルヴァ支部主催、第九回イタリア山岳会杯、ヴァルフルヴァ国際山岳スキー・ラリーを一九八九年五月七日に、トレセロ峰(三六〇二m)地域―オルトレス、チエヴェダレ、ハイ・ヴァレンチン溪

谷―にて開催致します。

貴チームのご参加をお待ちしています。近日中に、規約並に様式をお送り致します。

イタリア山岳会支部長
ルチアーノ・ペルトリーナ

興味のある方は、海外委員会にご連絡下さい。

*

海外委員会

●図書委員会の催し二つ

●第二十七回山岳史懇談会

テーマ 谷川岳東面の開拓とクラブヒュッテについて

講師 渡辺 兵力氏
日時 三月十七日(金)
十八時三十分

場所 日本山岳会ルーム

●第二〇回山岳図書を語る夕べ

テーマ 松方三郎の山と本

講師 島田巽氏・田口二郎氏
日時 四月八日(土)
十五時

場所 日本山岳会ルーム

図書委員会

あとがき 故陛下が、会報49号をご覧

になったことを知っている会員は少ないと思うので、年の改まったこの機会にお知らせしておこうと思う。

▼三年前、かつての私の学友から、その会報に載った『秩父宮殿下のご手記』を陛下がお読みになった、という電話をもらった。

▼秩父宮殿下と本会長老たちとの、登山を通しての交流には、故殿下の公的な面を意識させられるような話は殆どなかったように思う。

▼亡き弟宮殿下の生き生きとした手記をお読みになったという故陛下からも、同じ思いを感じることができた。

▼ハレー彗星と一緒にご覧になったという故陛下の秩父宮殿下についての想い出話を伺い、兄陛下と弟宮殿下との不変のつながりをそのとき私は感慨をもって思い浮かべたのである。(岡沢)

平成元年一月二十日

102 東京都千代田区四番町五一四

サンビュウハイツ四番町

発行所 社団法人 日本山岳会

発行者 今西寿雄

編集代表 岡沢祐吉

電話東京(03)四四三三

振替口座東京三一四八二九番

東京都港区赤坂一―三一六

赤坂グレースビル

印刷所 株式会社 技報堂